東北歴史文化講座

TOHOKU 東北

第5回 第2部

東北で紡がれた手しごとの物語

現代の「用の美」に宿る技と心

こぎん刺し（青森県立郷土館蔵）

2019.7.6(SAT)16：30

東北に伝わる手しごと

青森県

こぎん刺し
津軽地方に伝わる刺し子の技法。
麻布の野良着（こぎん）の布目を塞ぐように糸を刺す

蔓（つる）細工
自生するアケビや山ブドウの蔓で生活用具や農具を作ったのが始まり。今は買い物籠などが作られている

岩手県

南部鉄器
江戸時代中期、南部藩が南部鉄瓶の前身である茶の湯釜を作らせたことが起源

浄法寺（じょうぼうじ）塗
岩手県北部などで採集される国産漆を使用。本朱、黒、溜色の無地・単色で仕上げられたものが多い

秋田県

曲げわっぱ
秋田杉の板を曲げて弁当箱、盆などに成形。
平安時代にはすでに作られていた

樺細工
山桜の樹皮で茶筒や書類箱を作る。「桜皮細工」とも。密封性が高く湿気を遮断する性質がある

宮城県

雄勝（おがつすずり）硯
石巻市雄勝町に産出する黒色硬質粘板岩で、吸水率が低く劣化しにくい雄勝石が原料

仙台箪笥
原型は江戸時代末期、武士が刀などを入れた。
素材はケヤキやクリで豪華な飾り金具が特徴

写真提供／宮城県観光課

山形県

紬（つむぎ）
置賜地方では江戸時代後期より絹織物生産を開始。米沢織、長井紬、白鷹紬など各地で発展

羽越しな布
山間部に生育するシナノキの樹皮から靭皮（じんぴ）を剝ぎ取って糸を作り織り上げた古代織物

福島県

からむし織
大沼郡昭和村に伝わる、からむしを糸にした織物。
吸湿、速乾、耐久性に優れ、夏衣に重宝される

会津塗
会津領主の蒲生氏郷が産業として漆工芸を奨励し、根付いた。日用品や装飾品など幅広い

講師：田中陽子氏

昭和30年、青森県生まれ。手仕事と職人の力を次世代に繋ぐため、平成元年より「暮らしのクラフトゆずりは」を開業。オリジナルデザインやセレクトされた作品の数々は多くのファンを持ち、約20年にわたり日本全国各地で展示会やトークショーを行っている。

深まる一冊

ゆずりはの詩
田中陽子著（主婦と生活社）

職人たちと交流を重ねてきた「ゆずりは」店主の著者が、手仕事を通して出会った生きることの物語。現代の用の美の意味を問い掛ける。

主催：一般社団法人東北観光推進機構、東日本旅客鉄道株式会社
後援：青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県、公益財団法人東日本鉄道文化財団

東北で紡がれた手しごとの物語 現代の「用の美」に宿る技と心

ブナをはじめ広葉樹が多く、縄文の昔から豊かな東北の森は、暮らしの営みや手しごとの源だ

1 刺し子に込められた知恵と愛 そして無心につくる喜び

青森の刺し子は、綿も育たない寒冷な北国の女性たちによって受け継がれてきた手しごと。江戸時代、東北では麻を栽培して布を織り、衣類を作っていた。が、麻ではとうていこの地の厳しい寒さをしのげない。女性たちは、麻の織り目を埋めるように当時貴重だった綿糸を刺し、保温性と耐久性を高めて冬を乗り切った。刺し子には、生きるための知恵と、夫や子を思う家族への深い愛情が詰まっている。そして、一針一針心を込めるように刺す糸で、草花や動物など身近なモチーフを連ねて美しい模様まで描き出した。厳しい風土が生み出した用の美。そこに、暮らしの苦しさは感じられない。むしろ、無心に針を運び、モノづくりに没頭することへの喜びがあふれている。

「南部菱刺し」が伝わる青森県の太平洋側は、海から吹くヤマセという冷たい風で飢饉が多かった

2 作り手の心を受けとめ そこにある物語を語り継ぐ

十和田湖畔のホテルの女将だった田中陽子さんが、東北の手しごとと向き合うようになったのは平成元年。どこで、何が、誰によって作られているか定かな情報もない中、図書館に通い東北の伝統工芸に関する本をひとつひとつあたった。そうして探し出した職人を、3年かけて訪ね歩いたのだ。直接会い、仕事場の空気を感じ、言葉を交わすうちに「この人の仕事を伝えたい」と痛切に思ったという。そして、現代の暮らしに手しごとを生かす方法を探りながら、作り手の心を伝える場として始めたのが、クラフトショップ「ゆずりは」だ。刺し子をはじめ、手しごとにはそれぞれに深い物語がある。田中さんは、職人たちが紡ぎ出す物語を語り継ぐことによって、手しごとに新たな輝きを与えている。

からむし織に使われる糸は植物の繊維を細かく裂き、手で紡いでいく（福島県昭和村）

3 東北の手しごとを育んだ 自然への畏敬と感謝の思い

曲げわっぱを留める桜皮の模様は持ち主によって異なり、遭難時には目印になった

樹齢200年にも及ぶ杉の木から生まれる曲げわっぱ。山から採れるアケビや山ブドウの蔓で編む蔓細工。職人たちは材料を採ったあと、山にお辞儀をして帰ってくると田中さんは話す。縄文の昔から自然と共に生きてきた、深い山々に囲まれた地。暮らしの知恵として生まれた東北の伝統工芸は、大地が雪に閉ざされる冬、遠い春を待つ間の手しごととして育まれ、長い時を経ても失われることなく大切に受け継がれてきた。材料を与えてくれる山の恵みに感謝し、たったひとつのモノに丹精を込め、やさしく温かなまなざしで使い手を思う。手しごとに込められた、東北の職人たちの思い。モノがあふれ、さまざまなことに効率が求められる今、改めてその価値を考えたい。

山ブドウの籠。植物を採取し加工して材料をこしらえることが、手しごとの要となる